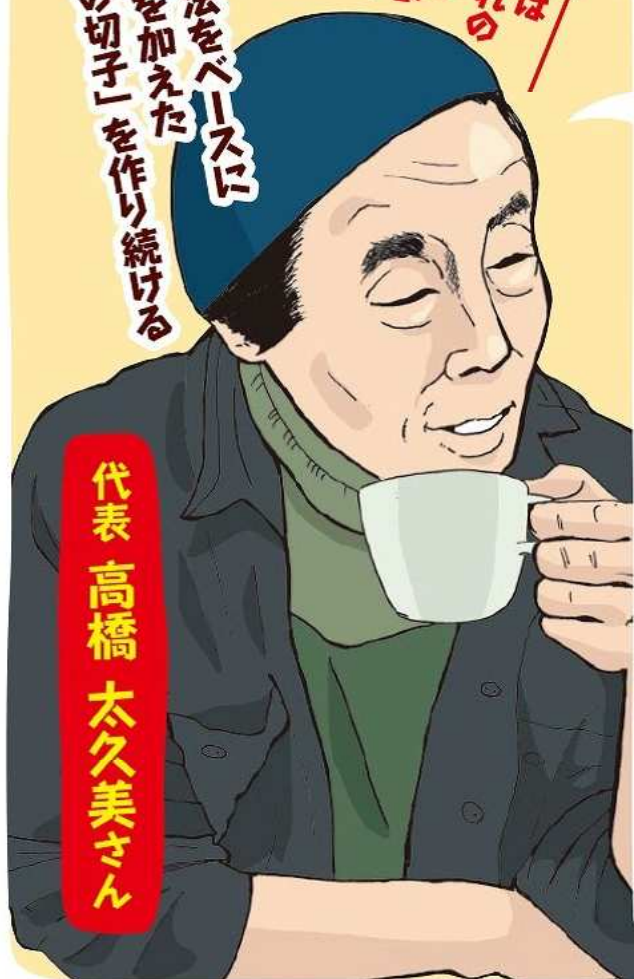


切子ガラス工芸研究所 たくみ工房

伝統技法をベースに
新しさを加えた
「たくみ切子」を作り続ける

もともととは
大阪生まれの
技術なん
ですよ



代表 高橋 太久美さん

私が切子の世界に入って50年。大きな転機は、百数十年前に途絶えた「薩摩切子」の復元という大仕事に参加したことです。

切子はもともと外国から長崎を経て大阪に伝わり、そこから江戸、薩摩でそれぞれ「江戸切子」「薩摩切子」として開花しました。薩摩切子は薩摩藩の廃藩とともに途絶えてしまったのですが、今から約35年前に大手ガラス問屋が復元をはじめ、私も職人として参加させていただきました。

切子には伝統的な技法がありますが、さらに新たなカット技法を生み出し、より美しく輝く切子を作りだしています。72歳になった今でも、新しいものを生み出す挑戦は続けています。

切子は「薩摩切子」「江戸切子」が有名ですが、実は大阪で初めて作られ、江戸、そして薩摩へと伝わったものなんです。だから、私はあえて大阪で切子ガラスを作り、切子の技術を後進に伝えていきたいと思っています。



安田さん、10年前に切子工芸研究所に入社して、切子の技術を学ばせていただきました。

奥の深い仕事です

木村真奈さん29歳。01時代に切子ガラスを習い、「たくみ工房」へ。自分のデザインはものカットはものが作れることがうれしい。失敗することもあるけど、この仕事が好きで、長く続けます。

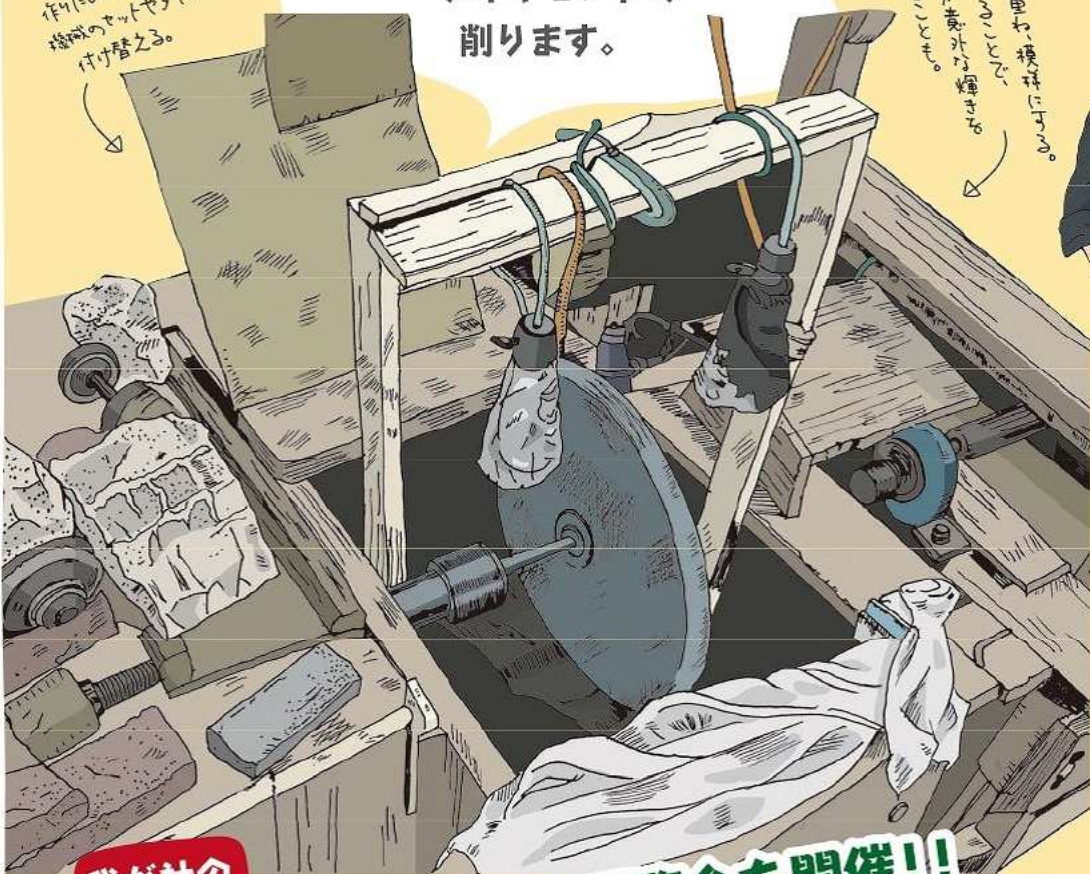
ガラスをカットし
模様が仕上がったときの輝きが
たまりません。



高校時代、美術部だったから、絵を描いたりするのは得意です。

ダイヤモンドも
セットした機械。
作りたい模様にあわせ、
機械のセットやダイヤモンドも
付け替える。

ダイヤモンドで
削ります。



カットを重ね、模様は10mm。
カットマシンで、
ガラスが意外な輝きを
発する仕組み。

高橋さんが「自分の夢を叶えたい」と決意して
母に「切子の技術をマスターしている一番弟子。
10年前に弟子入り。」



木村真奈さん(29歳)
安田公子さん(37歳)

美術高校出身。会社員ながら
工房に通い、切子ガラスを学ぶ。
5年前、会社を辞め、高橋さんの
もとで研ぎ始める

その人の
キャラクターや
性格なんかは、
作品にでますね。



江戸時代に生まれた切子を 今に伝える数少ない工房

たくみ工房を主宰する高橋太久美さんは、切子ガラス職人の第一人者。「切子」とは、中は透明で外側は色のついたガラス製のグラスやボウルを、表面の色のついた部分をカットマシンで削り、美しい模様を浮かび上がらせる技法のこと。日本では幕末に外国から伝わり、「江戸切子」「薩摩切子」として開花した。

高橋さんの工房は桃谷駅近くにあり、約100㎡もの広さに大小合わせて17台のカットマシンが置かれている。カットマシンにはダイヤモンドホイールと呼ばれる研磨用の砥石がセット。荒摺り、石掛け、磨き、バフ掛けという工程を経て、切子ガラスが生まれる。なかでも「磨き」は、一般的な切子が酸磨きという薬品を使って行うのに対し、たくみ工房ではコルク板や木板を使って手で仕上げる。このひと手間が、ガラスをより美しくキラキラと輝かせる。

高橋さんは作家としても活動し、日本伝統工芸近畿展に8回連続入選、新美芸会展での受賞などの実績を誇る。さらに、後継者の育成のために教室も開催。オリジナルグラスを作りたい方から作家志向まで、目的に応じた指導を行っている。

我が社の 自慢 ヨーロッパで展覧会を開催!!

工程を重ねるごとに
柄のふかさも輝きも違ってきます



高橋さんが作る切子は海外でも評価が高く、パリやベルリンなどで展覧会を開催。百貨店や美術館での展覧会にもたびたび出展。「たくみ切子」はまさに芸術品として高く評価されている。

切子ガラス工芸研究所 たくみ工房

<http://www.oct.zaq.ne.jp/takumi/>
〒544-0021 大阪市生野区勝山南1-2-33
TEL・FAX 06-6717-9668

事業内容/ガラス工芸品製作、切子ガラス教室(日本で数少ない切子ガラスを製作する工房。切子ガラスの技法を教える教室も開催)